

濁世を往く

ある者は欠けた槍を持ち、ある者は折れた刀を握り、ある者は弓に矢を番えたまま。

さんばらに鬻を乱し、雑兵どもが死んでいる。

「屍血山河に死屍累々、三千世界は諸行無常か」

地面を突いた錫杖が澄んだ旋律を奏で、十二連の遊輪が残照を弾く。

西空を赤く初め、なだらかな稜線に日が沈む。

野原には一面甲冑を着た屍が転がっていた。人だけではない、馬も倒れている。

悠揚迫らざる物腰で荒れ野を征くのは、立派な錫杖を携えた旅の法師。均整とれた瘦身に袈裟を纏い、孤高に歩む姿に気圧され、風すらも避けて通る。

鳥の濡れ羽色の髪を風がもてあそぶのにも動じず、怜悯な眼光宿す切れ長の眸で前を見据え、影だけを供に法師は行く。

もうすぐ日が沈む。早く宿を見付けねば厄介なことになる。気が逸り周囲に視線を飛ばす。行く手に小柄な影が現れた。戦場には場違いなとけない童女。

「可愛い子にはべべ着せよ　べべ着せよ　一張羅のべべ着せよ」

肩で切りそろえた黒髪をさざなみだて、ひとりぼっちで蹴鞠に興じている。

ぼうん、ぼうん。

「真つ赤に染めた帷子かたびら着せよ　死出の旅路に帷子着せよ」

童女の足元でまん丸い何かが跳ねる。弧を描いて空に上がり、また落ちる。

法師は瞬いた。

夕間暮れの空に緩い弧を描き、眩い逆光に縁取られて落ちてくるのは毬にあらず、しやれこうべだった。

「おい、その……あゝ」
両の眼窩に闇をためたしやれこうべが、空を滑り落ちてくる。

白くふくよかな手がそれを受け止め、振り向く。

風が止む。

やんごとなき童女がひたと法師を見据え、告げる。

「鬼がくるよ」

しやれこうべを蹴る。

「おっと」

片足で巧みに捌き、再び蹴り上げたそれを掴んだ時には童女はおらず、甲高く弾けた笑いの余韻と手中の髑髏だけが残された。

「ご忠告おおきに」

同刻、山を挟んだ反対側の平野。

涸れた眼窩を出入りする肥えた蛆を一瞥、しやれこうべを踏み碎いて歩くのは、擦り切れた襤褸を纏った少年。

年の頃十四・五。栄養失調気味の貧相な体軀はあばらも露

わで痛々しく、覚束ない足取りは今にも倒れそうな案配だ。泥と垢にまみれた肌は不健康に青黒く、夕映えが研いだ瞳は不吉に赤い。

ぼさぼさに跳ねた髪には粉を吹いたように虱が沸いていた。暮れなずむ空に黒点が舞い、濁った鳴き声が響もす。

死体を避けて歩きたくてもそこらじゅうに骸骨が散らばり、足の踏み場もない惨状を呈していた。

うるさい羽ばたきを伴い舞い降りたカラスが、喜び勇んで腐肉を啄む。鋭いくちばしで赤い繊維を啜え、限界まで引き伸ばし食いちぎる。

合戦場跡を夥しく埋め尽くす死体と屍漁りのカラスたち。常人ならば戦慄を禁じ得ぬ酸鼻を極めた光景に、夕映えを宿す瞳が凝視を注ぐ。

生唾を嚥下した喉が鳴り、我知らず手を伸ばし、震える指を折り畳んで引つ込める。

踵を返して誘惑を断ち切り、足早に先を急ぐ。

少年は裸足だった。何日歩き続けているのか自分でもわか

らない。腹が減っていた、物凄く。

猛烈な飢餓感に苛まれ、合戦場跡を通り過ぎ、鬱蒼とした山へ分け入っていく。

峠をこえれば里がある。そこで水を恵んでもらおうと思っただのだ。

日が暮れるのは思ったより早い。

頭上の茜空は墨を垂れ流したような闇に浸され、下生えに覆われた獣道に吹く風が、身を切る冷たさを増していく。

森の中からは鳥獣の咆哮が響き渡る。幽玄の霧深い谷にこだまし、空気を震わす遠吠えの主は狼か。

いい加減野宿に慣れたとはいえ、山中で夜明かしは抵抗を感じる。せめて屋根のある所で眠りたい。気休め程度で構わないから、雨風をしのげそうな岩陰や木の洞をさがす。

「ッ！」

無防備に踏み締めた小枝が折れ、尖った先端が足裏に刺さる。迂闊だった。

幹に凭れて息を整え、びつこを引いて先を急ぎ、視界を塞ぐ枝葉をかきわける。

唐突に視界が拓け、苔むした荒れ寺が出迎えた。

「助かった」

屋根は傾いて所々瓦が落ちているが、寝泊まりできるだけ有難い。心底安堵して雑草が芽吹く境内を突っ切り、縁側に飛び乗る。

障子に手をかけ開け放った直後、しゃん、と澄んだ金属音が響いた。

「誰や」

上方訛りの誰何に息を飲む。

首に突き付けられた冷たい感触の正体は錫杖。薄皮一枚隔て、痛い程の殺気が伝わる。

敷居を跨ごうとしたまさにその瞬間、何者かが錫杖を難いで通せんぼしたのだ。

「お前こそ誰だ」

漸く絞りだした声は情けなく上擦っていた。首を制す錫杖は小揺るぎもしない。

数呼吸おいて投げ返された声は、冷静沈着に落ち着き払っていた。

「名乗るほどでもない旅の法師や」

「怪しい」

「いやいやお前のほうが怪しいて。これから日が暮れるつちゅー刻限にガキが独り歩きかいな、物騒なご時世に命知

らずやな」

随分饒舌な化け物だ。馬鹿にした調子の指摘にムツとし、錫杖を押し返す。

「宿をさがしてたんだ。したらこの寺に行き会って……」

「ふうん」

暗闇に沈む輪郭が俄かに濃くなり、浮世離れた男の姿が浮かび上がる。

「そのなり、孤児か」

目を瞠つた。

自分が対峙していたのが化け物ではない事実には驚いたのと、本堂の闇から踏み出した青年が、予想を裏切る端正な容姿の持ち主だったから。

かつきり弧を描く柳眉、涼しげな切れ長の双眸、秀でた鼻梁と薄い唇。カラスの濡れ羽色の髪は艶やかな光沢を帯び、額に流れる。右の耳朵には珍しい、異国の飾りがたれていてた。

「本当に坊主？」

「見てわからんかい」

「仏門に入つたら剃るのがきまりだろ、そんなふさふさでいいのかよ。さては破戒僧か」

「阿呆かお前、剃つたらモテへんやんけ」

「は？」

要領を得ない返答に眉を寄せる少年に対し、腕を組んで踏ん張り返る。

「禿は精力絶倫うけどあんなんただの負け惜しみや。俺は上の毛を下に移さんでも手練手管で女を悦ばせられるさかいに、わざわざ剃ることないねんよ。ちゅうか嫌やろもじやもじやは、毛じらみ沸いたら痒いし汚いやん。病はもとから絶たなあかん」

錫杖の尻で軽く床を突き、ほくそえむ。

「ようこそ荒れ寺へ。連れができて嬉しいわ」

なんだ一体。

目の前の自称法師に対し疑念を募らせるも、忍び寄る夜の脅威には勝てず、だだっ広い本堂へ足を踏み入れる。

床は埃でざら付き、体重を乗せると軋む。

「お前の寺？」

「たまたま見付けて借りただけ。俺の寺やつたらもつと豪勢にするわ、壁中金箔貼りまくつて鳳凰や麒麟の蒔絵を……つておい聞け。自分から振つといてシカトかい、可愛げないガキやで」

打ち捨てられて何年たっているのか。朽ち果てた堂の奥に、巨大な仏像が胡坐をかいていた。

右と左それぞれに顔が彫られた怪相に気圧され、あとずさる。

「これは？」

「不動明王」

少年と並んで仏像を仰ぎ、謎の法師が語り始める。

「密教の根本尊の大日如来の化身といわれとる……正式名称は大日大聖不動明王、やったかな？」

「顔が二ツある」

「一面二臂で睨み利かせとんねん。手に持つとんのは降魔の三鈷剣と絹索、悪人を縛り上げる縄やな」

「蛇が巻き付いてる」

「アレは龍、正確には俱利伽羅竜王。三鈷剣は別名俱利伽羅剣というんやで、知らんのかい」

「……エセ法師じやなきそうだな」

「カマかけかい。やるやん」

不承不承認める少年を鼻で嗤い、壁際に退く。錫杖は片腕に立てかけたまま。

「梵名はアチャラナータ。天竺の言葉で揺るぎなき守護者を意味するらしい」

「どうりで強そうなわけだ」

妙な成り行きになった。

法師が顎をしゃくって促す。

「ボサツと突つ立つとられると目障りや。てきとーに座れ」
「自分の寺でもねえのに偉そうに」

「今は誰のもんでもない荒れ寺、先に陣取ったもん勝ち」

「盗人猛々しい」

あきれた矢先、屋根が軋んだ。法師が左右非対称の笑みを刻む。

「今夜は嵐がくる。早いとこ転がり込めてツイとるで、坊」

「坊？ 俺？」

「俺とお前以外おらへんやろ」

人さし指が往復する。心外だ。

「あおぐろ」

法師がきよんとする。微妙な沈黙に地団駄踏む。

「俺の名前！ さっき聞いたろ！」

「けつたいな名前やなあ。虱伝染ると嫌やから近付くなよ、そつちの隅つこで寝とれ」

ブチ殺してえ。

怒りに震える拳を握り込むあおぐろをよそに、追い立てた手を翻しざま着物の袂に突つ込み、もつたいぶつて何かを取り出す。

「それは」

「夕飯。夜は長いで、腹ごしらえせな」

見かけによらぬ豪快さで干し大根に齧り付く様にげんなりし、壁際で膝を抱える。

直後、腹が間抜けな音をたてた。あおぐろは赤面する。

上目遣いでおそろおそろ探れば、大口開けて大根を咀嚼した法師が、底意地悪い笑顔を浮かべる。

「物欲しそうに見てもやらへんよ」

「意地汚エ。坊さんなんだろ、施せよ」

「嫌じゃボケ、これは俺の干し大根じゃ」

なんて奴だ。開いた口が塞がらない。

干し大根を半分ほど食べ終えた法師が膝を崩し、膨れた腹をさすつため息を吐く。

「ごちそうさん」

「餓鬼道に落ちろ」

しれつと悪態を受け流し、干し大根の残りを袂にしまい、腕枕で寝転がる。暫くのち、雨粒が瓦を叩く音が響きだす。

法師の予想が当たった。

ひもじさに耐えて膝を抱くあおぐろの方に、おもむろに何が放られた。

「……何？」

「大根の尾っぽ」

「どーゆー風の吹き回しだ」

「寝ようとしとんにぐうぐううつつさいねん。衆生に施す人も務めやしな」

背中を向けたまま答える。あおぐろは身構え、警戒し、素早く大根を取つてがつ付く。

「！ うぐつ」

両手でガツガツむさぼり、喉に悶えて悶絶し、胸を叩いて事なきを得る。

さも愉快げな忍び笑いに涙目を上げると、こちらに向き直った法師が頬杖付いてにやけていた。

「……盗んだの？ 大根」

意趣返しに訊く。

「まさか。もろたんや」

「どこで」

「この山をこえたずつとむこうの村」

「有難いお経でも唱えて回ったのか」

「化けもん退治の見返り」

心臓が大きくはねた。

露骨な反応を面白がり、法師がまぜつかえず。

「今さら驚くほどのことかい。旅の法師ていうたやろ、道中仕事せな路銀を稼げん。化けもん退治が俺の生計たつき」

飄々と嘯いて錫杖を突き上げる様子からは、絶大な自信と余裕が窺い知れた。(以下続)